

教職大学院 Newsletter No. 3

福井大学大学院 福井大学·奈良女子大学·岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008. 4 2020.4.3(速報版)

途上国での学びの改善を目指して

独立行政法人国際協力機構 業務課長 中条 典彦

独立行政法人国際協力機構(以下、JICA)は、日 本の政府開発援助 (ODA) を一元的に行う実施機関で す。開発途上国の人材育成、制度構築等を行う技術 協力、開発途上国の開発資金を提供する有償資金協 力・無償資金協力など多様な手法を組み合わせ、開 発途上国が抱える課題解決を支援してきています。 このうち技術協力では、日本から開発途上国への専 門家派遣と並んで、開発途上国の行政官等を日本に 招き日本固有の専門知識や技術を伝える研修員受入 事業を実施していて、年間およそ 1 万人の研修員が 日本で学んでいます。なかでも、課題別研修と呼ば れる研修は、途上国のニーズに応じて様々なテーマ 設定(教育、保健医療、運輸交通、経済政策、農業 開発、防災、情報通信技術、自然環境保全など)を 行い実施されるもので、年間 400 コース以上実施し ており、教育分野はその中でも主たる分野のひとつ として 2018 年には 27 コースが実施されました。今 回ご紹介するコースはそのうちの一つとなります。

国連が 2015 年に策定した持続可能な開発目標 (SDGs) において、教育分野では「すべての人に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」という新たな目標 (SDG4) が掲げられました。SDG4 は就学前教育から高等教育までの幅広い分野を対象とし、これまで以上に教育の質の保証を追及するという野心的で難易度の高い課題の解決を目指しています。その一方で、教育がすべての SDGs の達成に不可欠なものであることから、国際社会は教育開発への取り組みを強化しています。

こういった国際社会の流れにあわせ、JICA は 2030 年までの SDG4 達成に向けて取り組むために、2015 年 10 月に教育協力ポジションペーパーを策定しました。ここでは「途切れない学び(Learning Continuity) の実現」という新しいビジョンのもと、教育の段階や国の状況によって質の高い学びが途切れることのないよう、また、一人一人の成長を重視した支援を目指してきています。

SDG4 が就学前教育から高等教育までの幅広い分野を対象としている中で、基礎教育分野では、子どもが読み書きや計算といった基礎的な学力を習得することに加え、自ら学び考える力を身につけ、学習意欲を高めることを目指し、相手国の取り組みを支援することを重視しています。

こういった JICA の基礎教育分野での協力方針に沿って、研修員受入事業では、開発途上国で実施している事業との連携をより促進するため、教育行政にかかわるコースや教員養成に関わるコース、就学前教育や障害のある子どものための教育に関わるコー

内容

巻頭言(1)

退任の挨拶 (その1) (2)

冬期集中講座に参加して (3)

長期実践報告会に参加して(4)

ラウンドテーブルに参加して(6)

インターンシップ/週間カンファレンス報告(7)

ミドルリーダー・マネジメントコース便り (8)

各地ラウンドテーブル参加報告(その3) (10)

スなど多様なテーマが取り扱われています。ここで 紹介するのは、授業研究を通じて子どもの学びの改 善につなげることを目指すものです。

課題別研修「授業研究による教育の質的向上」コースは2016年度から実施され、今回で4回目の実施となります。毎回、アフリカからの参加者を中心に実施され、研修員からは高い評価を受けてきました。参加する研修員は母国では教育の専門家や学校の教員の方々で、研修期間を通じて熱心に参加しています。JICAの通常の研修は講義、視察、討議が主で、特定の技術研修であれば、技術実習が含まれます。研修の主体は講義が主であることが多いのですが、本研修では講義は最小限で、提示されたテーマを基に研修員が自ら考え、意見を述べ、そして他の研修

員の意見を聞くということで研修が進んでいきます。 研修員はこのような手法で実施される研修は初めて の体験の場合が多く、当初は戸惑う研修員もいたよ うですが、研修が進むにつれ、慣れてゆき、知識や 経験を吸収しているようです。この研修員の主体性 を引き出す手法が本研修の特徴であり、参加研修員 の高い満足度につながっていると思えます。

研修員はこの研修を通じて得たことを基に帰国後の 行動計画 (アクションプラン)を作成し、発表しま す。途上国では、個人の意思があっても、体制が整 っていなかったり、予算や人員が十分でないため、 彼らの行動計画を実施するにも困難が伴うものと思 われますが、是非自国の課題に挑戦し続け、国が発 展していくことを期待しています。

退任の挨拶(その1)

退職にあたって

福井大学連合教職大学院 特命職員 木水蔦代

2017年4月から3年間の勤務を振り返りますと、1年目は連合に向けた動きがあり、2年目は国際展開が活発となり、3年目の今は大学院の一元化にむけて様々なことが変わろうとしています。教職大学院にとって激動の時期にお仕事をさせていただいたのだなと感じています。

最初の数か月は本当にわからないことだらけで、 先生方や院生の皆さんの問合せにも、とにかく「確認します」と繰り返していたと思います。また、会議に出ても、言葉はわかっても内容が理解できず、 終わってからいろいろな人に聞き理解を深めていったと記憶しています。連合教職大学院に向けた様々な準備についても、何がどうなるのかをやっとの思いで理解し何とかやりすごした1年目でした。2年目になると、エジプト教員研修をはじめとする国際展開の取り組みが活発になりました。EDU-Portニッポンパイロット事業、JICA課題別研修、エジプト教員 研修様々な取り組みの中でもエジプト教員研修にはかなりの時間を費やしました。前職で諸外国とのやり取りでは、予定は未定、一筋縄ではいかないものということはよく理解していたつもりですが、エジプト側とのやり取りはなかなかタフなもので、正直に言えば半ば放り投げたくなることもありました。3回の受入を終えた今でも、それぞれの受入で見られた課題がすっかり改善されたかといえばまだまだのところもありますが、それでも、"三歩進んで二歩下がる"というような状態が、五歩進んで一歩下がるくらいになっているのかなと感じています。3年目、国際展開はますます活発になり、大学院一元化に向け様々な変化を想定した動きも必要となりました。

そんな中でお仕事をさせていただきながら、本当に 大丈夫なのだろうか、可能なのだろうかとハラハラ することもありましたが、先生方の豊富な知識とご 経験と、心配はしながらも「何とかなるさ」という 強い思いの上に成り立つ協働でやってのけてしまう ところにはいつもさすがだなと思わされるばかりで した。そんな先生方の様子を拝見しながら、私もこ の3年間で「予知能力」に磨きをかけることができ たのではないかと思っています。前の年にやったこ とがそのまま同じことができるわけではなかったの で、次に何が起こるのか、それに対してどんなこと が必要になるのかを常に考え、想像しながらの毎日 でしたので、そんな中で培った能力、磨いた技術な のかなと考えています。 また、教職大学院が取り組む国際協力の様子を見守りながら、国際協力に携わっていたいという思いはますます強くなりました。その強くなった思いがこの度の退職の決断に大きく影響しています。国際協力の現場がこの北陸でさらに広がるような仕事をしたいと思っております。そして、教職大学院の取り組みがさらに発展するよう、立場は変わりますがサポートできればと思っております。3年間大変お世話になりました。

冬期集中講座に参加して

冬期集中講座の報告

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス女子中学高等学校 鷲頭 弘子

12月25日から3日間、年が明けて1月4日からの3日間、合わせて6日間の冬季集中講座では長期実践報告のまとめへ向けて、ひたすら「書く」ことと格闘する日々でした。そしてそれは「考える」こととの格闘でもありました。大学院に通っていた、ここ2年間の実践を振り返るだけでなく、これまでの教員生活の中での実践、さらには自分の教育観を作るもととなった生徒だった頃の自分自身が受けてきた教育も振り返り、それぞれの意味、つながりを「考える」毎日でした。教育に関わる専門職としての教師という仕事を意識して自分を振り返る時間は貴重なものでした。

書くことに行き詰まった時に助けとなったのは、グループでの先生方との語り合いでした。自分では気付かなかった点に気づかせてもらえる時間となり、また、先生方の実践への道のりを聞く中で、新たな発見もありました。お互いに意見交換することで、自分の実践の考察に新たな視点が加わり、さらに違う側面が見えました。同じ資料を読んでいても、実践の渦中にいた時と、いま読み返した時とでは別のものを読んでいるかと錯覚するほどでした。毎月のカンファレンスにおける「対話」はまさに学びの場でしたが、この「対話」を繰り返し行ったことで、長期の実践を振り返る時にその中にある大きなフレ

ームを捉えようとする自分自身の視点の変化をこの 冬季講座の中で感じました。

こうして、書いて、話して、考えて、また書いて、 を繰り返す中で、書き進めては戻り、また書いては 戻るという一歩進んで二歩も三歩も下がるような苦 しい時間もありましたが、何度も振り返り考える中 で、見えていなかったものが少しずつ見えてくる楽 しさも感じていました。実践の背後にある実践者の 思い、また学校という組織の中で複雑に絡み合って いる状況などを大きく客観的にみることで、課題点 が明確になり、今後へ向けて進む方向性がみえてき ました。

この2年間で「省察する」ことの重要性を強く感じましたが、これは子どもも大人も同じであることを実感しています。結果(点数)だけではなく、それまでのプロセスを大事にするよう生徒たちに言っておきながら、私たち教師自身が実績や結果にとらわれ、短い物差しで見ることが多かったように思います。長期実践報告をまとめることは終了ではなく、ここで得た視点でさらに実践していくことを意味します。さらにそれを省察し続けていくことが生徒と教師ともに高め合っていくことにつながるのだと確信しています。

長期実践報告会に参加して

長期実践報告会の意義とは

教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校 桑原 寿々奈

今年度も聴き手として参加した長期実践研究報告会(小学校免許プログラム履修で3年間の学びとなる為)。同期に入学し2年間苦楽を共にした先生方や同コースの3年履修の先輩方の長期に渡る実践を、じっくり聴き語り合うことは今回で最後となった。

長期実践研究報告会について昨年度のことを振り返ると、修了される先生方の報告を聴いて感じたことは、行ってきた実践を深く、さらに1つ1つの実践を繋げて省察されていて、私にとっては雲の上の存在とまではいかないが、正直なところ「すごいな。」の一言であった。長期実践研究報告書をもとに、これまで歩みを"学び"として価値付けして語る先生方の姿を目の当たりにして、「自分はここまでいけるのか。」と不安が募っていった昨年度の長期実践研究報告会であった。

それから 1 年が経ち、今年度の長期実践研究報告 会では、自分の実践と重ねて聴くことができている 自分がいた。特に、同じコースの先輩の報告で、「子 どもとの関わり方を考えて行く中で、対人関係につ いて学ぶことができ、人として成長できた。」とい う言葉が心に残った。それは、自分も教師としての 成長の裏には、人間的成長があると感じているから である。例えば、子どもとのかかわりに関するジレ ンマは、子どもだけでなく、他者とのかかわりにお いても起こりうるジレンマであった。それは子ども とのかかわりを通して、自分が教師として成長して いくのと共に、人として成長していくことであると も感じている。聴き手として参加する側として、長 期実践研究報告会が果たす役割考えてみると、この ように、他者の長期に渡る実践を聴き、自分と重ね て考えることができること、そして実践の中での他 者の成長の過程を聴き合い語り合う中で、それらに 価値付けしながら、自分を見つめ直して今後の成長 の糧にすることが、この長期実践研究報告会の醍醐 味であるのだと思う。

もう一つの役割として、来年執筆する長期実践研 究報告書への見通しが持てるということがある。私 は、長期実践研究報告書の作成に向け、これまでの 実践のまとめを整理して省察していく中で、「全体 のテーマ」(恐らくタイトルに当たる部分)や「実 践ごとのつながり」等について、悩んでいる部分が あった。長期実践研究報告会では、実践について語 り合う他にも、執筆者本人にタイトルをどのように 決めたのか、各部や各章ごとにはどのようなつなが りがあるか等、執筆者本人にその意図を聞くことが でき、今後の執筆に大変参考になる部分が多かった。 さらに、長期実践研究報告会だけでなく、これまで 数多くの先輩方が書き残してくれた長期実践研究報 告書自体が、自分の実践の足掛かりや今後の見通し になっている。また、このような実践や世代との結 びつきについて、柳沢(2011)は以下のように述べて いる。

実践と実践、世代と世代の結びつきは、表明の場、 共有の場における直接のコミュニケーションによっ て、そしてそこで強いインパクトによって活性化さ れていくが、もう一つ、文章・書き言葉・記録によ って、その場におけるコミュニケーションを超えて 特続的に共有されていく。

つまり、他者の実践や各世代を結びつけるものとして、長期実践研究報告会という「表明の場」「共有の場」や、「持続的に共有されていく」ものとしての長期実践研究報告書があるのではないかと思う。そう思うと、1年前と比べて長期実践研究報告会や長期実践研究報告書の意義について実感できている自分がいるなと感じる。

○参考文献

福井大学大学院教育学研究科 教職開発専攻(教職大学院)柳沢晶一

「学び合う学校文化の重層」『学校拠点協働実践報告 Vol.1 No.1 福井大学教育地域科学部付属中

学校研究会「学びを拓く《探究するコミュニティ》」 第 1 巻 学び合う学校文化より』株式会社エクシート、2011 年、P233

長期実践研究報告を書き終えて

ミドルリーダー養成コース2年/千葉県立保健医療大学 福島 昌子

福井連合教職大学院に入学し、早くも 2 年が経と うとしています。なぜ、入学を考えたのかというと、 純粋に「学びたい」「学び直したい」と思ったから です。そして、この実践研究報告の「はじめに」に も記したが、中等教育学校の教師と管理職の生活を 約30年間にわたって送ってきたところで、学校とは、 授業とは、教育とは、どうあるべきものなのかという問いにぶつかったことも、入学を考えた理由の一つです。しかし、考えてみると、この学びたいという思いと、学校教育に対する問いは、通じるものが あったようにも思います。

そこで、この実践研究報告を、教師としての歩み を「自分史」として記すことで、その問いに対する 答えが何かしら見いだせるのではないかと考えまし た。また、現在、福井連合教職大学院では M2 の学生 ですが、昨年の3月に国立大学附属の管理職を辞職 し、千葉県の県立大学で教職課程を担当する教員と して新たな生活をスタートしています。それもあっ て、これまで初等中等教育の教師として生きてきた 人生の集大成として、実践研究報告を書き上げたい という思いも強くあったといえます。この本報告を 自分史として執筆しただけに、教師として生きてき たその時々の自分と向き合うことになり、時には辛 く、悲しく、時には、若いころの自分に励まされ、 後押しされながら、書き進めることとなりました。 そのため、自伝のようでもあり、実践記録のようで もあり、様々なものが織り交ぜられての実践研究報 告となっています。

執筆するにあたっては、特に意識したことは、た だ時系列ごとに実践してきたことを書き綴るのでは なく、教師として生きた意味をストーリーとして書 き進めることを意識するようにしました。それは、 そこに自分の存在があることを自覚する意味もあっ たといえます。

したがって、本報告のストーリーの主軸を「授業」を中核に据えて、教師としての歩みを俯瞰的、対照的に自身を見つめ、捉え直すこととしました。そのため、これまで執筆された先生方の実践研究報告とは、少しばかり異なった新たな報告書になっていると思います。

今、こうして執筆し終えて、何かが変わったのだ ろうかと自分自身に問うてみたときに、果たして入 学当初に抱いていた答えなき問いに向き合えたのだ ろうか。またその答えを見つけられたのだろうか。 正直なところ、書き始める前と何も変わっていない のかもしれない。そして、答えも見つけられていな いのかもしれない。ただ、はじめて内なる思いで教 師としての自覚ができ、自分の足でちゃんと立って いるという納得解が得られたようにも感じられます。 また、こうして実践研究報告を執筆することにより、 教師としての自身のフレームが何を軸にして育まれ ていったのか、そして何を大切に教師をしていたの かが、可視化されたような気がします。不思議なこ とに、それを教えてくれたのが、様々なところで登 場してくる生徒たちや同僚の先生方だったのです。 こうしてみると、今更ですが、如何に生徒と先生方 に支えられて、教師をさせてもらっていたのかがよ くわかります。

また、本報告を自分史としても執筆してはいましたが、それだけではなく、この実践研究報告を手に取ってくださる先生方のことを常に思い描きながら書き進めてまいりました。自分が書き記したことで、

何かしら先生方にお役に立てることはないか、残せるものはないか、希望をお渡しすることはできないかと、常に思いながら執筆を続けてきていたといえます。是非とも、先生方にその思いが届けられたなら幸いです。

この実践研究報告を書き終えて、教師というこれまでの殻「フレーム」から脱皮し、また新たな教育の世界に歩み始めようとしている自分がいます。

最後に、多くの同志である先生方や教職大学院の 先生方に感謝し、「あぁ、何て良い教師人生だった のだろう」と記し、筆を置かせていただきます。

ラウンドテーブルに参加して

ラウンドテーブルでの学び

ジルリーダー養成コース2年/北陸高等学校 中嶋 旬子

大学院で学び始めたばかりの頃は、自身の取り組みを話し、職種も年代も違う先生方の実践を聴くことが、どのように自分の学びに繋がるのかわからなかった。お話を伺う先生方の実践から、自分の実践にすぐにでも活かせるような手がかりを求めていた。対話よりもむしろ、素晴らしい教授法や上手くいく技法を教えてもらえるような講義スタイルを望んでさえいた。

しかし、その考えは違っていた。ラウンドテーブルでは、挑戦していることや、失敗したこと、上手くいったこと、モヤモヤしていることや分からないことを語り合う。それぞれの迷いや不安、時には不満を真剣に聴き、励まし合い、悩みや葛藤を共有する。自身の実践をふりかえり、見つめ直し、気づきがあり、また新たにアイデアや疑問が浮かんでくる。ラウンドテーブルでの経験によって、自分自身をメタ認知し、考えを整理し、さらなる次の挑戦に向かうことができた。

学びの深まりには、実践の歩みを問い直そうとする語り手と、その展開から学び取ろうとする聴き手が集う場が必要である。他者の多様な意見は自身の考えを広げたり、深めたり、見直したりするきっかけになる。キャリアや教科を越えて教師が語り合い、それぞれのよさを知ることは、教師としての成長において相乗効果を生み出す。それぞれの想いや不安、

疑問に思っていることを率直に語りあうことでお互 いを認め、成長し合うことができる。

感じていることを率直に表現でき、自己と他者を 尊重できる関係を築くことは教師にも生徒にも求め られている。生徒の希望進路や学校の伝統文化をふ まえて「これからの学校」について話し合い、それ を具体的行動へとつなげる際にはできるだけ多様な 意見に耳を傾け合うことが必要である。若い先生も ベテランもすべての先生が「これからの学校はどん な存在でありたいのか」「学校には何が求められて いるのか」「教科や学年としての指導のありかた」 など自由に語り合い、お互いの強みや弱みを安心し て打ち明け合えるような関係を作り、教師のチーム 力を高められるような研修や場が必要である。その ためには自分の意識改革はもちろんだが、まわりの 教員の意識改革も必要である。様々な個性を持った 教師をつなげることもミドルリーダーとしての役割 であると考える。教科や学年、校務分掌を超えた多 角的なアプローチで学校として全員が大切にすべき ことを考え、語り合えるようになるように、学校全 体を巻き込んで、生徒だけでなく教師も学び、成長 できる雰囲気を校内に育みたい。

対話を重ねても教師の考えや想いを合わせるのに は時間がかかる。短時間でできるようなものでもな いし、ヴィジョンを言語化し、共有したからといっ てすぐに変化が見られ、成果が出たりするとは限ら ない。話し合いの結果は自分が望んだものでなくても、結論に至る過程で自分の意見に耳を傾けてもらえれば、それまでの話し合いは無駄ではない。自由な対話によって生まれた意見を拾い上げ、合意形成に反映していくことができれば、「これからも話話し合おう」と、自分のいる組織の未来に希望を見いだせるはずである。学校のシステムや構造に問題があったとしても、全てをそのせいにしていては前に進まない。「何を学ぶか」ではなく、「どのようにごまない。「何を学ぶか」ではなく、「どのようにごち、知識をどう活用したらよいか、自分が何をすべきかを自分で決定する力を身につけていくというヴィジョンを持ち、生徒と共に成長できる教師でありたい。自分だけでも前進しようとする姿勢が、生徒たちだけでなく、他の教員にも火をつけると思う。変化の土壌は確実に育まれて

いると信じて一歩一歩進んでいくことが学校改革へとつながっていく。

大学院で学んでいく中で、私自身が「答えのない問い」に立ち向かい、自分を変え、改善し、実践したり語ったりすることに意味があると気づいた。教師自身が学習者としての視点を持ち、生徒と共に苦しみながら、もがきながら歩んでいかなければならない。これまで以上に教師にも学び続けることが求められている。日々進化していくために、省察を欠かさず、それらを経験に落とし込み、思考や活動を改善していく試行錯誤の積み重ねを大切にしていきたい。皆が当事者意識を持って新しい時代に向けた授業改善をおこない、自分の考えや想いを自由に言い合える場をつくり、学校全体が活性化するように力を尽くしていきたい。

*ラウンドテーブルの各 Zone の参加者の声は次号に掲載いたします

インターンシップ/週間カンファレンス報告

シンガポール研修に参加して

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校 清水 広平

2020年1月1日は、これまでの元旦とはすべてが 異なっていた。私は成田空港にいて、朝から荷物検 査を待つ長蛇の列の一人となっていた。普段の元旦 の過ごし方は、寝て、食べて、正月特番を観て、そ して食べて寝るという次第である。私は、シンガポ ールに向かっていた。昨年の9月ごろに本プログラ ムを大学院の先生に伺い、参加することを決意した。 動機はとても単純で、今だからこそできることだと 思ったからである。他の国の教育現場にインターン 生として1ヶ月間学ばせてもらえる経験は、誰もが 手にできる機会ではない。行った先で何が学べるか を迷って行かない決断をするのではなく、行った先 で私が主体的に何かを学び取ってくればいい話だと 気付いたのである。結論から言うと、この決断はや はり正しかった。

着いてから 1 週間後ほどで学校でのインターンシップが始まった。私は、福井では中学校でインターンシップをさせてもらっている関係で、シンガポールでも Secondary School と呼ばれる 13 歳から 17

歳の生徒が学ぶ、中等教育学校に配属された。多民族国家という話はよく耳にしていたが、実際に生徒が学ぶ教室に行き、改めて多民族国家の実態を目の当たりにした。日本の教室風景とは明らかに異なっており、様々なルーツを持つ生徒たちが一つの教室で共に学んでいた。また、授業においては、メンターの先生が英語の先生であったため、観察実習は英語の授業を参観させていただいた。しかし、生徒が学ぶのは英語だけではない。彼らのルーツとなる言語も Mother tongue として、バイリンガル教育という考えの下、生徒たちは学んでいた。

ある日、生徒と話していたときにこの言語教育に 関する話題になった。そこで私はその生徒に、「あ なたたちにとって英語を学ぶ意味って何?」と疑問 を投げかけた。その生徒は、「私たちの国は、異な るルーツを持つ人たちが一緒に生活をしているから、 そこでコミュニケーションを取るために共通語が必 要。だから、英語はその役目を担っている。」と語 った。正直に言うと、面を食らった。生徒が学ぶ意 義を見出して、それを何気ない会話の中で言葉にしていることに驚きを隠せなかった。シンガポール研修を通して最も印象的なのは、この教育と社会の連関性である。至極当然のことであるが、教育とは人を育むという観点から、社会の中心に据えられるものである。そのことをこの研修を通して改めて気づかされた。

その意識は、シンガポールの社会的成立背景に関 して知見を深めた際により強固なものとなった。 1959 年に自治領となり、1965 年に完全な独立を遂 げた。その当時のシンガポールは、それまでイギリ ス・インド・中国を繋ぐ貿易の拠点となっていたこ ともあって、中国・インド・マレーシア等から多く の移民が暮していた。もちろんそこには宗教的・人 種的対立もあった。さらに、安定した経済状況もな ければ、依拠できるような潤沢な天然資源を有する わけでもなく、唯一あったのが Human resource (人 的資源)であった。当時、周囲には独立を果たした 国々が乱立したおり、競争も激しかった。その中で、 人を育てることによって安定的な経済を構築し、持 続可能な発達した社会を形成することを目指した。 その中心に位置付けられたのが、言うまでもなく教 育であり、その社会的通念は現在でもこのシンガポ ール社会で一般的に共有されている。

社会の根幹に教育があるという意識は、様々なところで見受けられた。例えば、先生の社会的地位をこの15年ほどで再構築しており、現在ではその社会的地位は、医者や弁護士と変わらない。また、国家予算の第一位は防衛費であるが、次いで第二位が教育に充てられている。そのため、シンガポールにあ

る公立学校は、どの学校に通おうとも同じだけの施設が完備されており、人員配置もほぼ同じだという。教員の働き方も尊重されており、生徒が入室できないオフィスが職員室の代わりに用意されており、事務を担当する人も約 10 人以上配置されているため、生徒の事務的手続きや保護者対応などを教員が直接的に関与しない仕組みが整備されていた。つまり、教師の仕事は、生徒の学びを支えることであった。生徒の学び支えるために、教師間のコミュニティも重要視されており、互いから学び合う仕組みも学校の中に存在し、実際にそれが生徒たちの学びに直接的に関与していた。また、それだけの余裕を教師の働き方に供出している。

シンガポール研修では、授業における教師と生徒 の関係性など、より実践に近いことも多く学んだ。 それを踏まえて、より俯瞰的にこの「現在」を捉え た時に見えてきたのは、社会と教育の繋がりであっ た。しかし、やはり限界性にも言及しなくてはなら ない。自明なことであるが、それが日本でも模倣す ることはできない。なぜならば、国土、文化的土壌、 社会的成立背景、人口など多くの面で日本とシンガ ポールは異なっている。その限界性に目を向けず、 手放しに日本の教育を語るわけにはいかない。しか し、教育を社会の中心に据えることは、日本でもシ ンガポールでも変わらない。私は、日本において教 育から社会を変革していく方法をこれからも考え続 けていきたい。その考えはこの研修を通してとても 強くなった。最後に、この研修を支えて下さった方々 に心から感謝を申し上げたい。本当に貴重な機会を ありがとうございました。

ミドルリーダー・マネジメントコース便り

2年間の学びを振り返って

学校改革マネジメントコース2年/敦賀市立松陵中学校 橋本 光一

2年前の平成29年、私は敦賀市立松陵中学校に 勤務していた。12月に入った頃、校長が呼んでい るということで、急いで校長室に行ってみると、校 長から思いがけないことを言われた。「福井大学の 教職大学院に行ってみないか。」ということであっ た。

私はそれまで、「教職大学院が何であるか」、「教職大学院で何を学ぶか」ということさえわからない 状況であった。また、「マネジメント」という言葉 は何となくイメージはできるが、具体的にと言われるとなかなか説明できなかった。「組織をマネジメントする」とは何なのか。「運営」なのか、「経営」なのか、「より良いマネジメント」とは何なのか、少しでも手がかりになることを知りたいと思い、教職大学院に入学したことが記憶に残っている。

私は、平成元年3月に福井大学教育学部を卒業しており、約30年ぶりに福井大学に戻ることになった。大学生のときは理科が専門であったため、当時

の2号館にいたが、30年ぶりの2号館の様子はかなり変わっていた。1号館については、30年前と特に変わらない懐かしい雰囲気があった。大学院入学当初は、大学生当時のいろいろなことが思い出され、またここで学ぶのだなという気持ちを持ったことが思い出される。

平成30年4月、私は敦賀市立赤崎小学校の教頭として赴任することになった。それと同時に、教職大学院に入学した。管理職となり、今までは子供を相手にしていたのであるが、教員を相手にするようになったり、他の団体と連携したりと、「組織を経営する」、「組織を運営する」ということが常につきまとうようになった。

そのような中、教職大学院での夏期集中講座、冬期集中講座等を通して、組織の動かし方を考えたり、月間のカンファレンスで、いろいろな立場の先生方の経験や考えを聞いたり、ラウンドテーブルで先進校の実践を聞いたり、現在直面している教員の採用に関する問題や教員養成の在り方について意見交換をしたりすることで、より広い知識を得ることができたと思っている。

また、何よりも得がたいものであったと思うことが、「人とのつながり」、「人脈」ができたことである。私自身の考え方ではあるが、最後は「人とのつながり」がものを言うと思っている。普段は話すことのできない立場の人とも話をすることができた。これは、教職大学院に学んだからこそ、得られたものであると思っている。

現在は、松陵中学校に戻っているが、赤崎小学校とは違った課題がある。それぞれの場所で、それぞれの課題がある。それを解決するために、どのような組織をつくり、どのように運営し、その目的・目標を達成するか、決まったパターンがあるわけでもなく、状況に応じて対応していかなければならない。また、そうすることで利益・メリットが生まれるようにしていかなければならないと考える。入学当初は、この利益・メリットを生み出す「経営」という概念がなかったと反省している。

長かったようで、短い2年間であったが、今後も 教職大学院での学びを生かして、組織の経営・運営 にしっかり当たっていく覚悟である。

教師を支える新たな「学びの学習支援組織」になることを願って

ミドルリーダー養成コース2年/千葉県立保健医療大学 福島 昌子

現在、「学びたい」「学び直したい」と考えてい る先生方が、全国にどれほど多くいることか。それ は教職に 34 年間携わってきた自分自身の経験と数 年前から公立小中学校の教員研修の指導助言講師に 関わってきたことにより、より一層感じるようにな りました。なぜ、多くの先生方が学びたいと思うの か。その理由は、その先生の所属する学校種やキャ リアによっても質は異なりますが、共通して言える ことは、皆、学校で起こっている様々な諸問題(生 徒指導などのいじめ不登校の深い状況、保護者の多 様な価値観の対応)などや授業改善、学校改革など に向き合い、対処し解決しなければならないからで す。しかし、どこの学校もそれらに対する手立ての 術が乏しく、一人の教師や校内組織の知恵だけでは 解決できないような複雑な問題が多く起こっている のが現状です。だからこそ、多くの先生方と管理職 はこれまでの自分を省察し新たな学校づくりのため に「学び直したい」と考えるのです。

私は、昨年、本連合教職大学院に国立大学附属の 副校長という立場で、東京の遠距離から受験をしま した。私が本大学院を希望した理由は 4 つです。一 つは「学校、授業、教師の意味を問い直す」というこ。2つ目は拠点校方式のため、休職せずに学べるということ。3つ目は、教職大学院のカンファレンスの学びが翌日には学校に活かせるということ。そして、最後の4つ目は、学校は管理職が変わらなければ、学校改革はなし得ないと考えたからです。そこで、管理職自ら外に省察的なコミュニティの場をもち、そしてその場を通して地域や分野を超え、教師同士また管理職同士が協働探究し、共に知恵を共有することで先生方や学校を支え、真の教育改革ができると考えたからです。

故に、上記に述べたことを多くの先生方や管理職の先生方が活用できるようにするためには、本連合教職大学院の拠点校方式のシステムを広く周知し、具現化することと考えます。その意味では令和2年度より東京に本教職大学院東京サテライト校の設立は国内に大きな反響を与えることと思われます。現在、令和元年9月末の東京都国公私立の幼小中高校は、全校で3499校が存在します(基幹統計)。また、東京は交通網の発達、情報集積の中枢でもあります。東京における展開は、関東近辺、その他地方からも

通うことを可能とし、教師の実践力を培う協働的な 学習プロセスを支えることのできる「新しい学習支 援組織」のデザインを広く展開する機会でもあると いえます。そして、全国の先生、学校、教育委員会 に向けて発信することで、個々の能力や技能の獲得 の問題、それへの手立ての問題、そして教師として の専門職性の形成とそれを支える同僚性や学校改革 における新しい社会関係を教師自身が結んでいける ような新たな学校研修システムの実現が可能になる といえます。また、それが組織化されることは、実 は全国の子どもたちの豊かな成長を支える基盤にな ると私は信じています。

したがって、東京、関東、全国の先生方に福井拠 点校方式の「新たな教師を支える学習支援組織」を 広く展開することで、福井連合教職大学院が多くの 先生方や学校を支える高等教育機関をリードする教 職大学院になることを願っております。

各地ラウンドテーブル参加報告(その3)

宇都宮ラウンドテーブルに参加して

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校 石田 凉

令和2年2月8日、9日に、宇都宮大学教育実践フォーラムに参加した。そこでは、私と同じ教職大学院に通う大学院生の方たちと交流したり、宇都宮大学と福井大学の違いに触れ改めて、自分の学んでいる環境や自分の学びについて捉えなおすきっかけとなった。

8日は教育実践フォーラムの「教育実践プロジェク トの発表会」で、長期インターンシップでの実践に ついての発表を聴かせて頂いた。そこで、私は、福 井大学教職大学院との違いを目の当たりにすること になる。まず大きく福井と違うのが、長期インター ンシップのシステムである。自分たちは、4月から週 3 回のインターンシップと木曜カンファレンスを通 して、実践で感じたこと、学んだことをもとにして、 自分たちで理論を作っていく。このスタイルで自分 たちは1年間、教師の総体を学び、実践力を高めて きた。しかし、宇都宮大学の院生の方たちは、イン ターンが始まるのは、夏休み明けの9月からインタ ーンシップがスタートする。4~7月の期間は、大学 で授業を受け、その中でインターンシップに取り組 む上での課題を設定して、約5か月のインターンシ ップに臨むのである。私は、あらかじめ課題をもっ てインターンシップに臨むことで、課題に焦点化し たインターンシップに取り組めるので、どっちつか ずな状況にはなりにくいと感じた。しかしその反面、 インターンシップを行っていく中で、自分の課題意 識が変わったりしたときや、5か月という福井と比べ て短期間の中で、子どもたちとの関係性を築くこと

など、福井と比べて対応が難しくなる要素も含んで いると感じた。後の宇都宮大学の院生さんたちとの 交流会では、発表会を通して自分たちが感じたこと や互いの普段の実践、それぞれの大学院についてた くさんお話させて頂いた。私の思った通りのことで 悩んでいらっしゃる院生さんもいらっしゃった。そ の中で、ある方が自分に「研究テーマはなんですか?」 と聞いてくださった。私はその質問に答えられなか った。現在「1年目のまとめ」を執筆中であるが、こ の1年間は、目の前で起こることに対応することに 精一杯になっており、授業実践、部活動、協働学習 などさまざまなことを経験させて頂いている中でそ のテーマ、タイトルを決定できていない状況であっ た。宇都宮大学の院生さんたちは、新たにインター ンシップを通して見えた課題も明確で、自分はテー マのようなものがないのかと疑問に感じた。その中 でも、社会科の授業実践には、特に力を入れてきた ので授業実践や協働学習が欠かせない要素になるの は間違いないが、自分の課題が明確な宇都宮大学の 院生さんたちは自分よりも輝いて見えた。

また、もう1つ福井と大きく違うと感じたのはストレートマスターと現職の先生方との関係性である。福井の場合、私たちストレートマスターの院生が現職の先生方とお会いするのは、主に月間カンファレンスと長期休みの時の集中講座である。その中で、たくさんの先生と自分の実践を語ったり、先生方の実践を聞かせて頂き、多くの学びを得ている。宇都宮大学教職大学院の現職の先生方は、派遣、もしく

は休職という形をとって、学びに来られており、ス トレートマスターと同じカリキュラムで、同じよう に授業を受け、同じように課題を持ちインターンに 臨まれていた。そのため、ストレートマスターと現 職の先生方との関係性は、非常に親密であり、スト レートマスターの院生さんは、授業実践などや生徒 指導に関してのアドバイスをメンターの先生からは もちろん、同じインターン先の現職の先生からもた くさんのアドバイスをもらっているとお聞きした。 また、プライベートでも非常に仲が良く、「親しい 中にも礼儀あり」という言葉にふさわしい関係性が 築けていると私は感じた。これは、福井にはない強 みであり、現職の先生方から得られるものは計り知 れないと感じた。そのため現職の先生方は、「若手 を支える」といったキーワードをテーマにしていら っしゃる方が多かった。

翌日のラウンドテーブルでは、自分の授業実践に 絞った内容を、福井大学教職大学院の学びを踏まえ て発表させて頂いた。その中で、協働探究の難しさ、 生徒が自分事と捉えるにはどうしたら良いか、どう子どもの声を拾って授業を展開するかなど、私と同じような内容で悩んでいる先生もいらっしゃり非常に有意義な時間を過ごすことができた。

今回、宇都宮大学の教育実践フォーラムに参加させていただき、福井と宇都宮それぞれの強みを知り、改めて自分の学びを捉えなおすことができた。まず、自分は課題を明確にし、2年目の「課題別実習」に臨んでいきたいと思った。1年目、経験したことを活かし、特に授業実践に重きを置き、宇都宮大学の院生さんのように明確な課題意識を持ち2年目に臨みたいと思う。また、宇都宮大学教職大学院のストレートマスターと現職の先生方との関係性を見て、来年度一本化する教職大学院の新しいコミュニティの形成に少しでも還元していきたいと感じている。今回、参加させていただき、自分たちの強みを再確認し、さらに他大学の強みに触れ、2年目に向け非常に学びの多い2日間となった。

Shared Vision and Patient Approach

A Strategy of Uganda's SESEMAT Lesson Study

福井大学連合教職大学院 特命助教 マグラブナン ポリン アンナ テレーゼ マラヤ

A program for follow-up visit of the University of Fukui to its Uganda KCCP JICA trainees was held last March 2 to 5 of 2020. The main theme was 'A Reflection on the Implementation of Co-Inquiry-based Lesson Study.' It was spearheaded by SESEMAT (Secondary Science and Mathematics Teachers' Program) National Center with the special arrangements by Mr. Francis Mwesigye and Ms. Betty Auma with the support of Mr. Geoffrey Namisi, Mr. Rogers Makafu, Ms. Eva Kabayonga and Mr. Wilson Byamukama. The team from the University of Fukui is composed of Prof. Atsushi Inaba, Dr. Kosaka Masato and Ms. Pauline Mangulabnan. The training was held at Kololo Secondary School and Emma Secondary School. The program was designed to showcase the co-inquiry-based lesson study style being piloted at chosen schools in Kampala and Lango regions,

and to sensitize other regions into participating in the KCCP(knowledge co-creation program)-inspired project of SESEMAT. It was attended by over ninety (90) Ugandan educators, national trainers, regional management coordinators and regional trainers from all twenty-seven (27) regions.

The courtesy call discussion at the Permanent Secretary (PS) of the Higher Education in Uganda revolved around possible future partnerships between SESEMAT, Uganda teacher training institutions and the University of Fukui, in addition to sharing current professional development situations and activities. As guests were welcomed during the program, Minister Muyunga from the Ministry of Education expressed his high hopes as a result of the co-inquiry sensitization measures. Ms. Betty Auma also presented the rationale and current state of the KCCP

program in the two regions of Uganda. She emphasized the strengthened teacher collaboration and motivation of students from the pilot schools as some of its results. The workshop done by the University of Fukui focused on the significance of reading, sharing about and writing practice records to support teacher professional development, co-inquiry-based practices, lesson study and student development. The activities were patterned after Fukui's training style which involves reading, writing, discussing and reflecting. On their end-of-the-day notes, participants were sharing that their aims of grasping co-inquiry and understanding KCCP in Uganda were met. They had also appreciated the Three Seeds-approach that some of them would want to utilize in their own classrooms and schools. The positive effects of the teacher acting as a facilitator and students being able to co-inquire with their classmates were also gained their spotlights in the afternoon sharing.

Three secondary level classes (Chemistry class, Business Arithmetic class, and Thematic Grammar English class) were visited by all participants during the second day at Emma Secondary School which is a KCCP pilot school. The three teachers who opened their classes were also participants in the said program and have been practicing inquiry-based learning classes. In the Math class, the teacher had introduced the concept of discount and its formula by turning the classroom into a small fruit market place. Initially, designated groups discussed how to bargain and the price to attach to provided fruits. It was followed by three more cycles of connected activities:



Real objects in Math Class

groups have to bargain with other groups to buy fruits, students have to explain reasons for negotiating price, and mathematical computations behind discounts and prices. Despite the big class size, students were engaged in the group and class discussions. The teacher was moving around to check on progress or to give guidance when needed. The strategic grouping of 10 students seated face-to-face deepened discussions as students recalled their experiences in bargaining and as students assisted each other in computation. At the end of the class, both the teacher and students left satisfied with their learning. The Math teacher shared in his reflection that there was a point when he was considering cutting short the discussion time to pave way for the derivation of a formula. However, he decided not to when he saw students' deep engagement in the group work. In the end, he supplied one of the formulas to have enough time for practice. The class was able to achieve much but had left the teacher unconvinced of his prior decision. In our group, this reflection sparked ideas on teacher roles and inquiry in the classroom, most especially on the aspect of teachers being patient. The afternoon was spent for participants to write practice records and share them in their groups through the roundtable. They earnestly wrote and shared. At the end of the day, they were satisfied that the two days were meant to be shared with their colleagues back in their regions. As they had embraced the significance of practice records, they added that more experience and feedback on writing will improve better their future practices.



Groupwork in the English Class

During the two days, I was impressed and inspired by the zeal that Ugandan educators have displayed. They had kept an open mind and learning attitude all throughout the training. But even more impressive was the teamwork that the previous KCCP Fukui participants and the SESEMAT National Training Center have demonstrated during our whole stay there. Geoffrey Namisi and Rogers Makafu were sharing that they all work towards the same vision which made them work to complement and support each other. France Mwesigye and Betty Auma added that they have understood that small baby steps are more effective than one big step in educational reform; hence,

the SESEMAT KCCP program is designed to spread throughout Uganda slowly and steadily. The first two regions of Kampala and Lango are already producing results. These results are then shared with other regions through workshops and training to encourage the latter to be in the same boat. This is Uganda's new cascading approach grounded on their culture and context while integrating learned ideas from Fukui. Each one of them is continuously searching for the best approach to improve their education system -- and they are doing this with the common vision to educate the future of Uganda.





- *ご所属は 2020 年 3 月時点のものです
- *この配信用の NL131 号は、速報版としてお送りしております

【編集後記】桜が満開のこの時期,新型コロナウィルスの感 染拡大という未曾有の事態に直面し,日程をはじめ様々なこ とについての調整が続いております。みなさんにはご心配を おかけしており、申し訳ありません。刻々と状況が変化する なか、なかなか先が見通しにくいのですが、新たな方法の模 索も含め知恵を絞り、この状況をみなさんと共に乗り越えて いけたらと思っています。どうかお体には十分お気をつけて お過ごしください。また、ご入学されたみなさん、心よりお 祝い申し上げます。(ニュースレター編集委員会)

教職大学院 Newsletter

2020.4.3 速報版発行 2020.4.15 内報版発行 2020.4.30 公開版発行

編集・発行・印刷 福井大学大学院 福井大学・ 奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学 連合教職開発研究科 教職大学院 Newsletter 編集委員会 〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp